田嶋智太郎のFXレポート☆彡　　２０２４年０４月２５日更新分

■　この週末・週明けはシートベルトをきつめに

ついに、ドル／円が１５５円処で意識されていた“壁”を突き破った。１５５円手前のところには大量のノックアウトオプションに絡む防戦売りが控えていたが、ここにきて徐々に“手を引く”動きが見られていたことも事実。「もはや、１５５円突破は避けられそうにない」と諦める向きが増えていた模様で、すっかり薄くなった“壁”を労せずして突き破ったという印象である。

そこからは当然、ストップロスが断続的に巻き込まれる展開となり、一時的にも１５５．３８円まで上値を試す展開。すでに、本邦当局は介入体制万全といった様相を呈しているが、ひとまずは本日から開催される日銀金融政策決定会合の結果と総裁会見を受けた市場の反応を確認したいというところもあろう。

既知のとおり、植田総裁は先週末にかけて幾度か「（円安進行で基調的な物価が上がって、それが）無視できない大きさの影響になれば、金融政策の変更もあり得る」と述べていた。それでも市場は躊躇なくドル／円を１５５円台に押し上げたわけで、場合によっては植田総裁が日銀会合後の会見においてより強い口調で間接的に一段の円安進行をけん制してくる可能性もあろう。

仮に植田総裁が円安けん制の姿勢を示しても市場が無反応を決め込む可能性は十分にあり、少なくともそれ以前に財務省が“実力行使”に踏み切ることには慎重になるだろうと思われる。

まして、米国では本日（２５日）１－３月期のGDP速報値が発表され、明日（２６日）には３月の個人消費支出（PCE）デフレータの発表も控えている。その結果次第では、ドル買い増しの動きが市場で強まる可能性もあり、本邦当局が「その前に介入することは極力避けたい」と考えてもおかしくはない。

このように考えていくと、ここから週末・週明けにかけてドル／円の値動きがかなりボラタイルなものとなる可能性は排除できない。シートベルトをきつめに締めて、これまで以上にドル／円と向き合うことには慎重であらねばならないと思われる。

もちろん、より長い目で見ればドルの先行きには危うさも付きまとう。足元で米インフレが固有の粘着性を発揮していることで利下げ開始時期は後ずれすると見られており、もはや米１０年債利回りは４．６%台半ばの水準まで再び浮上してきている。次第に米株価の上値は重くなってきており、今後は少々まとまった下げに見舞われる可能性も否定できない。米株価が大きく下押せば、途端に米消費は勢いを失い始めるに違いない。

つまり、足元で米国経済が強みを発揮するほど、先々の落ち込みが大きくなる（強すぎるように見える経済が、いずれ急転直下で冷え込む）可能性も相応に高まる。事ここに至っては、もはや「ソフトランディング・シナリオ」の信ぴょう性も低下するばかりである。

ユーロ／ドル(日足)23年12月～

一方、ここにきてユーロ／ドルは徐々に持ち直す動きを見せている。左図に見る通り、足元では一目均衡表（日足）の転換線を上抜ける動きとなってきており、当面は２１日移動平均線を再び上抜けるかどうかが注目される。

これまでに欧州中央銀行（ECB）による６月利下げ開始を十分に織り込み、すでに年後半の改善を見通す向きも市場にはある模様。この週末にかけて発表される米指標が強めに出れば、一旦は売り戻される可能性がある（目先は基本戻り売り）ものの、長い目では徐々に下値が堅くなってくる可能性も出てきたように思われる。　（０４月２５日 ０９：５０）